

三島 日本大学 同窓会々報

第 12 号

昭和 58 年 2 月 1 日
静岡県三島市文教町 2
日本大学三島同窓会発行



昭和五十七年度総会開催

日本大学三島同窓会昭和五十七年度総会は、母校日本大学三島学園・第32回大学祭四日目の十一月三日・午後四時から、同学園内記念館で盛大に開催された。とくに今回は、同日午後一時から幹事会も開かれ、種房 繁会長から、その他議案として「三島学園体育奨励会」設立の趣旨説明がなされた。これは、三島同窓会、高等学校同窓会、周辺校友会がタイアップして、三島学園学生・生徒のスポーツ振興に寄与しようとするものであり、本総会において万場一致で承認された。

総会は、種房 繁会長の挨拶の後、中塩利雄議長、渡辺勝一副議長、書記団に宮川 守・吉川圭子両常任幹事を選出、議事にはいった。議案は左記の通りで、事務局の説明をうけ、承認された。

- 一、前年度事業報告について
- 二、前年度決算報告について
- 三、監査報告について



- 四、本年度事業計画について
- 五、本年度予算について
- 六、活動状況報告について
- 七、その他

1、三島学園体育奨励会設立について

総会に続いて恒例の懇親会が、同会場において恩師の先生方を囲んで盛大に行われ、終始なごやかな雰囲気でも続くかと思われたが、次の同期会がある期もあって惜しまれつつ幕を閉じた。



三島学園も創設三十数年にして
 愈々四年制学部・国際関係学部の
 第一回の卒業生を送ることになっ
 た。誠に御同慶の到りである。又
 更に五十八年四月を目指して修士
 制の大学院の認可の準備も着々進
 められている由、大いに結構と云
 わざるやである。然し思い返して
 みると三島創設以来、種々の苦勞
 をされた諸先生の多くは、今は没
 く、又或いは三島に残つて居られ
 ない方々の方が多い現在、依然と
 して学園建設に當々と努力して居
 られる顧問・鈴木先生はじめ浅野
 先生、事務の広瀬女史他極めて少
 ない。そのせいであるのかどうか
 は別として最近の三島学園の中に
 時には、当らず



「新しい出発への期待」

— 国際関係学部への構想 —

会長 種房 繁

ヤンパスで過ごす青年・淑女の諸
 君の交流をもつと盛んにし、それ
 を母胎として、各学部との往来も
 意識的に活発にしなければならな
 い。三島のみに固執していると日
 本大学の一学部としての国際関係
 学部でなくして一単科大学として
 の国際関係学部になつてしまふ。
 又国際関係学部である以上、学部
 そのものを国際的に開放、或いは
 交流させてゆかねばならない。以
 下は小生の理想像としての国際関
 係学部の在り方への、一つの提案
 と解して戴ければ幸甚である。順
 序は前後するが先ず第一に

時に、留学のシンボルとしての博
 士号を与えるよう配慮のある指導
 をする事。五、外国の大学との単
 位の交換契約を獲得することを急
 ぐこと、これは留学生、或いは交
 換留学生制度を実施する上の不可
 欠要項であり、何も長期に亘らず
 とも夏休み期のみの短期サマース
 クール等の開催についても極めて
 大切な要件であると思う。以上申
 し述べたのは小生の一つの期待で
 あり、夢であるかも知れない。何
 故ならば、これの推進には莫大な
 資金が必要であり、一朝になし得
 る能わざるものかも知れない。然
 し三島学園が来たる二十一世紀に
 向かつて、開かれたる大学として

ともしばしばで

ある。尤も諸環境の相違、又社会
 全般がそうであるように、戦後混
 乱の創設期とは異なり、社会が一
 つの規律化と云うか、ホームル化
 して来ているのは当然であるが、
 今、三島学園は漸く四年制の第一
 回の卒業生を出す段階であり、そ
 の意味に於いては全く新しい創設
 期に入つたばかりとも云うべき時
 であると思つて差し支えないと思
 う。そのような意味では学園の内、
 外を問わず各位の協力を得て、三
 島学園らしい環境づくりに努力す
 べき時でもある。それには先ず学
 園のあるべき姿について未来像と
 云うか、理想を高く掲げるべきで
 ある。又青春のある時期を同じキ

と関連致しますが、二、諸外国
 の大学と学習単位の互換契約校を
 早く沢山つくる事。三、諸外国よ
 り交換、或いは単独で来る留學生
 用の近代宿泊設備を整つたセンタ
 ーの建設、更に此の設備に附帯し
 て小ホールを建設し留學生との交
 換並びに日本大学十三学部の学生
 との交換試合、その後の交歓会に
 用い単独学部の孤立化を避けるこ
 とに意を用いる事。四、校友、同
 窓、地域社会の有力者に訴え幾つ
 かのスカラシップを設定し留學生
 の経済的支えの機構の強化を計る
 事、大学院の博士課程迄の設置を
 急ぐ理由は、これら熱心な留學生
 には一特に低開発国よりの一帰国

的なのものがあつて然るべきである。
 以上学園発展に寄せる期待観であ
 るが、最後今一つは、同窓の子弟
 の本学への進学問題であるが、親
 子代々本学へと云う同窓の子弟に
 対し、門戸をなんらかの基準を公
 開の上、設定しその進学への路を
 開いて戴きたいものである。前述
 のスカラシップにしてもそうした
 のではなからうか、紙面がないの
 でこの件につき外国の例など省く
 が学園の一考を同窓を代表してお
 願いしておく。第二の創設期を迎
 えた我が三島学園の発展を心より
 祈念致します。

(東洋醸造理事)

役員選出なる

会長	種房 繁	(22・24)	常任幹事	小早川隆義	(42・43)
副会長	奥田 吉郎	(23・25)	常任幹事	宮沢 愛子	(42・43)
副会長	遠藤 逸雄	(26・27)	常任幹事	染谷 徳昭	(42・43)
副会長	西村美枝子	(22・24)	常任幹事	田中 由雄	(42・43)
副会長	見上 勇逸	(27・28)	常任幹事	渡辺 忠昭	(42・43)
副会長	平井 千枝	(34・35)	常任幹事	林田 孝二	(43)
事務局長	瀬川 一男	(23・25)	常任幹事	相田 信次	(44・45)
常任幹事 (会計担当)	石川 貞夫	(28・29)	常任幹事	鈴木 正八	(44・45)
常任幹事 (庶務担当)	角田 義廣	(30・31)	常任幹事	久保田博明	(45・46)
常任幹事	西村 満男	(21・23)	常任幹事	榎本 睦美	(45・46)
常任幹事	宮沢 主計	(25・26)	常任幹事	西野 和衛	(46・47)
常任幹事	井川 一見	(26・27)	常任幹事	江本 博勝	(46・47)
常任幹事	市川 紀子	(37・38)	常任幹事	宮川 守	(47・48)
常任幹事	高田 菊平	(36)	常任幹事	杉山 謙	(48)
常任幹事	久保田 勝	(38・39)	常任幹事	沼上 博美	(48・49)
常任幹事	佐野 勝己	(39・40)	常任幹事	大島 裕二	(52・53)
常任幹事	小出 博	(40・41)	常任幹事	吉川 圭子	(53・54)
常任幹事	土屋 忠得	(40・41)	常任幹事	持田 光雄	(32・33)
常任幹事	柴田 正	(41・42)	会計監査	中島 敏男	(30・31)
常任幹事	土屋 貞明	(42・43)	会計監査		

昭和56年度 事業報告

1. 奨学金の給付並びに同窓会長賞授与

昭和56年度日本大学三島学園在学生より、次の者が推薦された。短大関係は、昭和57年3月25日の卒業式当日、学部教養課程関係は、4月9日の三島学園開講式当日、それぞれ授与式が行われた。

奨 学 金 4 名 (別紙)

同窓会長賞 5 名 (別紙)

1. 学園歌集発行

学園歌19首を37頁に収め、3,000部を発行し、三島学園新入生全員に入学祝として渡した。

1. 総会並びに懇親会

昭和56年11月3日(火)16時から、総会並びに懇親会を、日本大学三島学園・記念館で開催した。

1. 幹事会

昭和56年10月16日(金)18時30分から、日本大学三島学園・8号館で開催した。

昭和56年度 収支決算書

(昭和56年4月1日～昭和57年3月31日)

(単位：円)

支 出				収 入			
項 目	予 算 額	決 算 額	差 異	項 目	予 算 額	決 算 額	差 異
奨 学 費	350,000	316,650	33,350	会 費 収 入	1,990,000	2,018,000	△ 28,000
学 園 歌 集 発 行 費	200,000	195,000	5,000	雑 収 入	814,985	588,775	226,210
同 窓 会 報 発 行 費	250,000	67,000	183,000	前 受 金 収 入	500,000	582,000	△ 82,000
各 科 同 窓 会 補 助 費	300,000	40,000	260,000				
総 会 並 び に 懇 親 会 費	370,000	370,340	△ 340				
会 議 会 合 費	250,000	139,973	110,027				
通 信 運 搬 費	100,000	26,000	74,000				
事 務 費	30,000	0	30,000				
雑 費	200,000	119,440	80,560				
予 備 費	300,000	0	300,000				
計	2,350,000	1,274,403	1,075,597	計	3,304,985	3,188,775	116,210
基 金 繰 入 額	530,000	1,400,000	△ 870,000	基 金 繰 出 額	0	0	0
次 年 度 繰 越 金	500,000	589,387	△ 89,387	前 年 度 繰 越 金	75,015	75,015	0
前 受 金	500,000	582,000	△ 82,000				
繰 越 金	0	7,387	△ 7,387				
合 計	3,380,000	3,263,790	116,210	合 計	3,380,000	3,263,790	116,210

貸 借 対 照 表

(昭和57年3月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	789,387	基 金	14,100,000
定 期 預 金	13,900,000	前 年 度 繰 越 額	12,700,000
		本 年 度 繰 入 額	1,400,000
		次 年 度 繰 越 金	589,387
		前 受 金	582,000
		繰 越 金	7,387
合 計	14,689,387	合 計	14,689,387

昭和56年度収支について関係帳簿ならびに証憑書類を精査いたしました。記帳その他正確であることを認めます。

昭和57年11月2日

会計監査 持 田 光 雄 ㊞

中 島 敏 男 ㊞

昭和57年度 事業計画

1. 奨学金の給付並びに同窓会長賞授与

日本大学三島学園を昭和58年3月卒業予定（国際、短大）、移行予定（学部教養課程）の者を対象として行う。

教養課程（法、経、商、文理）……………若干名宛奨学金（2名程度）

短大課程……………各1名宛奨学金または同窓会長賞

国際関係学部……………各科1名（計2名）奨学金

1. 学園歌集発行

学園歌21首を38頁に収め、4,000部を発行し、三島学園新入生全員に入学祝として渡す。

1. 会報発行

会報第11号（昭和57年11月）発行 4頁 5,000部

会報第12号（昭和58年2月）発行 8頁 5,000部

1. 名簿発行

役員名簿を作成する。さらに短大科別、教養期別名簿作成を推進する。

1. 総会並びに懇親会

昭和57年11月3日（木）16時から、日本大学三島学園・記念館で開催する。

1. 幹事会

昭和57年11月3日（木）13時から、日本大学三島学園・記念館において開催する。

昭和57年度 収支予算書

（昭和57年4月1日～昭和58年3月31日）

（単位：円）

支 出				収 入			
項 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減(△)	項 目	本年度予算額	前年度予算額	増 減(△)
奨 学 費	550,000	350,000	200,000	会 費 収 入	2,570,000	1,990,000	580,000
学 園 歌 集 発 行 費	280,000	200,000	80,000	雑 収 入	1,232,613	814,985	417,628
同 窓 会 報 発 行 費	200,000	250,000	△ 50,000	前 受 金 収 入	500,000	500,000	0
各 科 同 窓 会 補 助 費	300,000	300,000	0				
総会並びに懇親会費	400,000	370,000	30,000				
会 議 会 合 費	250,000	250,000	0				
通 信 運 搬 費	100,000	100,000	0				
事 務 費	30,000	30,000	0				
雑 費	200,000	200,000	0				
予 備 費	500,000	300,000	200,000				
計	2,810,000	2,350,000	460,000	計	4,302,613	3,304,985	997,628
基 金 繰 入 額	1,000,000	530,000	470,000	基 金 繰 出 額	0	0	0
次 年 度 繰 越 金	500,000	500,000	0	前 年 度 繰 越 金	7,387	75,015	△ 67,628
前 受 金	500,000	500,000	0				
繰 越 金	0	0					
合 計	4,310,000	3,380,000	930,000	合 計	4,310,000	3,380,000	930,000

同窓雑感

長倉 祐 作



早いもので三島を出てから三十一一年が過ぎました。

移校直後は二・三回母校を訪ねたこともあったが、その後十数年間は忙がしさにまぎれて近くを通っても寄る機会がなかった。昭和五十三年四月十五日には、まだまだお元気であった玉津徳太郎先生の定年ご退任にともなう謝恩会が開催せられ、久しぶりに先生方はじめ同窓生諸氏と会う機会を得、非常に懐しく感激しました。我々同窓生（第三期生）も在京者数名で過去数回集まったこともあったが、何分にも人数が少なく、久しく絶えてしまった。ところが、この謝恩会を機に今後定期的に年一回開催しようと話し合うことができた。これまた玉津先生のご指導と感謝する次第です。たしか学部に移校する時（ブレメの一部は他大学へ、短大は卒業）は千名以上いたはずだが、現在消息のわかっていない同窓生は二十数名にすぎない。母校の事務局に聞いたところにはわかるかと思っ

たが、全然わからないらしい。唯一一人地元宮沢主計君（伊豆長岡町出身）が常任幹事として頑張っていてくれたことは心強い限りです。

私自身が初めて総会に出たのだからあまり他を責められないが、我々が卒業した昭和二十九年頃は朝鮮戦争直後の不景気で就職難でした。そのため同窓生の殆どが地方に帰って就職し、中央にとどまったのは少数にすぎなかった。その後は仕事や生活に追われればなしで五十歳近くになって、やっと余裕ができたと言うところでしょう。とにかく皆様方で第三期生をご存知の

方は事務局か同期生までご連絡下さい。我々の同窓会も何とか各回同窓会と肩を並べられるよう隆盛にしたいと思っています。

ところで本会の総会は毎年十一月三日文化の日に行われることになっているそう、当日も学園は大学祭一色でした。我々の在学時代よりも、はるかに華やかで女子学生の多いのには驚きました。「短大家政科があるからだ」と聞いたが、そればかりではないようです。我々の時も一応男女共学にはなっていたがまだ女子学生は数える程しかいなかった。又、今の学生は制服を着た者が少ない。先生と間違えようがないバリツとした背広を着た者、派手なラフな服装をした者、実にカラフルで個性的だ。昔は黒一色、角帽に詰襟に金ボタン、又それが一種の憧れであり誇りでもあった。入学早々新調の制服制帽を身につけて「日本大学教養部」と書かれた標札のかかった赤煉瓦の門をバックに写真をとる郷里の両親に送ったものだ。唯々学生気質の変化に今昔の感をきんじえません。その赤煉瓦の門も今は作り替えられ、兵舎を改造した校舎も近代的な立派なコンクリート校舎に替わっている。銀杏並木、希望の森、思索の森の緑と、かつての事務局が記念館として残され昔を思い出させてくれた。

先生方も、秋葉、安藤、玉津、三好、輕部先生とすでに世を去り、生前ご無沙汰に打ち過ぎたため不肖の教え子になってしまったことが残念です。裏のグラウンドに出て見ると、昔学窓から眺めた美しい富士山の姿に接し、久しぶりに帰って来た息子を見るような暖かい母性を感じてなりません。かつて過ごした三島の青春の日々を懐古しながら母校の発展を祈ります。

（昭25・26、法学部在学、
税務研究会業務局）

二期会と理科のメツ Cheney

柳 下 孝 子



とにかく驚いたのである。昭和二十三年四月の事であった。古い

兵舎の講堂に集まった新入生の内に、女子は数名いたものの、それは文科生で、理科には唯の一人も女はいないのである。事務所にかけ込むと、吉原先生の顔が見えて、「今年は理科は女子は一人」とのたもった。

ああ、すでにおそし。かくして、十七歳の女の子と、兵隊服のオッサン学生の混合で理一D級は、若き浅野先生を受持に発売したのであった。途中、学園大闘争があったが、我が学年は、乏しき食糧をわけ合い、家族の如く仲良く過ごしたが、以後五十七年の今日迄その友情は続いている。我が青春は三島学園を抜きにしては考えられない程、我が人生に深くかわり合っている。

馬小屋校舎は、女子の為には不便で、殊にトイレと、更衣室には困った。女子では一級上の長谷川女史がラグビー部のマネージャーで気をはいていた。上級生では北村和夫氏が、入学式の次の日から演劇部に強制的に入れようとして二カ月も断れど、あきらめず、瀬川さん（後のシャンソン歌手故人）に仲に入ってもらったのもなつかしい。北村氏は、板張の廊下を下駄で足音高く歩くので、英語の吉田先生が、「役者にしては、歩き方が悪い」と云われたものだ。

玉津先生のお宅は、おへに行つて、北海道産の純白バターをパンに付けたのを頂いた。先生では数学の太木先生が、円周率を何十桁も暗記しているのに、驚いたり、我が生物班のオンケル事三好先生には、亡くなる迄「家の娘よ」と可愛がって頂いた。同級生では、三島市の奥田市長、帯広市の田本市長はじめ、富士急の芦沢専務、中嶋組社長中嶋信行氏、大成建設杉山部長、等々。大学には瀬川一男氏が事務局にいられて、助かっている。

私は世話好きが嵩じて、二期会の事務局を引き受け、かつての「理科のメツ Cheney」はクラス会の通知に、名簿作りに、忙しい。お陰で元旦には、北から南からなつかしい年賀状が山積みとなる。「SLが走ったから」とか「ふぐを食べに来い」とか、旅行のおきそいも数々、有難い事である。数年前迄は年一回、会報を発行して、伝言版も載せていたが、近年さばって、休刊している。三島市内の二期会のメンバーも、時々集まって云いたい事を言う。勝手に「奥田市長の親類」になる事になっているが、その仲の良い事は、本物の兄弟以上である。五十五年の六月には、文科理科合同で、三島に於てクラス会が開かれた。会をもつたびに事務局は、準備に大変忙しい思いをしている。しかしまだまだ「理科のメツ Cheney」は健在である。

ああ、酒と友は古い事にこした事はない。新年に友の健康を祈る。

（昭23・24、予科在学、主婦）

思い出の三島

渡辺 すみ

諸先生方はじめ同窓生の皆様、益々お健やかにご活躍の事と存じます。

ここ雪国越後長岡は「雪おろしの雷」が一晩に四〇センチ位の雪を子供達にプレゼントしてくれることもあります。子供達には嬉しい雪も生活していく大人達には厳しいものがあります。そのような中から片時も忘れられないのは、一年中暖かく、しのぎよく「今朝は富士山がきれいですね」と挨拶を交し、通学・通勤した私の第二の心のふるさとでもある三島での五年間の生活です。

昭和四十一年短期大学部食物栄養コースに入学と同時に当時の女子俊英学寮に入寮させて頂き、斯くして親元から生まれて初めて離れた私の生活が始まりました。四年制大学で納めるべき単位と余り差のない単位を二年間で納めるのは、とても多忙であり、夏・冬休みも栄養士の卵として病院・工場・学校給食の現場や教育実習の場に入られて頂き、そのレポート作成に明け暮れし、諸先生方、現場の諸先輩の働きぶりにお尻をたたかれて、栄養士と中学校保健体育教師のお免状を手にした時は感激でした。それも偏に、ホームシックで寮の屋上で涙した日、レポート作成に追われる日々、淋しさに負けず悪い道(19)に入らずに済んだのも、母の日に共に涙した佳き寮友に恵まれました事、そして、何よりも「夜の八時の門限をもっと伸ばして」などとよく要求した多勢の年頃の娘達をお預り下さった学校当局はじめ、当時の岩田寮長、副寮長先生方のご苦勞、ご心勞のお陰様と、自分も母親となり更に深く感謝している日々でございます。

卒業後、長泉町三軒家に下宿させて頂き母校学生課職員としておつとめさせて頂きました。当時学生課長であられました当会

事務局長の瀬川先生はじめ職員の皆様から大変よくして頂きまして本当に幸福でした。特に並外れのおつちよこちよいの私。先生方の会議の席で湯呑や土瓶を割っては、「君はどこか間が抜けているねえ。」と一緒に破片を拾って下さった加園先生。「瀬川物屋さんには嫁にゆきなさんな。」と瀬川先生には冷やかされたり励まされたりご心配をお掛けしました。

就職の年、例の大学紛争突入。学生の立場から職員立場になったものの、あの素晴らしい環境と施設、担任制もあってここにも負けないであろう家庭的な三島学園に紛争は不似合だと思いました。次第にバリケードが組まれ、学内の女子寮にも住めなくなり、勉学の場の教室も失い右往左往する後輩の涙していた寮生が忘れられません。私には悲しい体験でしたが、この経験を通じて血や肉にせねばと思いました。



さて、私は瀬戸物屋ではなく、家電関係の主人の元へ嫁ぎ、そっかしい嫁、妻、二人の子の母として六人家族と共に平安な日々を過ごさせて頂けるのも、豊かな思い出でぎっしりつまった三島時代のあったお陰様と時折懐しくアルバムを家族と繰ってあります。

(昭41・42、食栄コース在学、主婦)

予科時代の思い出

石川 泰 男



時はめぐり歴史は繰り返す。少年老い易く学成り難しとか。光陰

矢の如し……。厳寒の地、北海道旭川中学から、青春の夢と希望に胸をふくらませて、昭和二十二年秀麗の富士を仰ぐ日本大学三島予科に入学してから、早や三十余年の年月が過ぎ去りました。省みて当時の事を回想するたびに、正に昨日の事のように様々の懐かしい思い出が、走馬燈のように脳裏を駆けめぐります。

私の故郷、旭川は当時、真冬には氷点下三〇度も気温が下がる肌氷る地であり、そこで育って来ただけに、三島での温和な氣候、美しい水、落ち着いた三島の街、そして箱根連山、富士の秀麗等々。別世界の夢を見ている気持ちを抱くに充分でした。

このようなすばらしい環境での三島予科から教養部修了迄の三年間の学園生活は、校舎こそ兵舎跡の今からみれば粗末な施設でしたが、私の人生にとり我が青春に悔いなしの実にたのしい一時期であった事を、心から感謝致しております。

当時の三島予科は実にバラエティーに富み、旧制高等学校の香りのブンブンとした時代であり、白線帽子に黒マント、カラカラカラの下駄の音、時には校庭の芝生でアグラをかき、マルクス論やらカント論を論じ、ある者は三島のダンスパーティーで彼女

とのデートで青春を謳歌し、スポーツに、学園紛争に、演劇にと、それぞれ若い情熱を力一杯燃焼させ、真理の探究に没頭し青春を思い切りぶっつけた事が、鮮烈に思い出されます。

「人生五十年」の坂をのぼりつめた私にとって、当時の若々しいはち切れそうないぶきを心の片隅みに、今後いつまでも持ち続けて、少しでも社会の為に御役に立って行ければと念じております。

最後に、私達の育った母校三島学園が、このすばらしい自然環境の中で、予科から教養部を経て着実な発展を示し、ここに四年制学部の新設が第一期生を送り出すとしている事は、諸先生、学園職員の皆様及び諸先輩の並々ならぬ御努力、御苦勞の賜物であり、心から御祝い申し上げますと共に、今後の一層の御発展を御祈りする次第であります。

(昭22・24、予科在学、
柳IPG取締役社長)

第32回 三島学園大学祭

(昭和57年10月31日
～11月3日)

